



国際コーディネーター

福岡県国際交流局国際交流員

Alex Blamberg

アレックス・ブランバーグ

私にとって、CLAIRフォーラムなどの出版物を読み、また各JET研修会に参加する楽しみの一つは、全国のJETがどういう活動をしているのかを知ることです。同じJETプログラムに参加し、内容がほぼ同じにもかかわらず、みんなの職務内容が様々なので知るのが楽しいです。従って、私もこの場を借りて、自分の仕事について紹介したいと思います。

現在は福岡県庁国際交流局に所属し、CIR・PAとして4年目です。最初の出勤日をよく覚えています。担当者と打ち合わせを行い、福岡県の方針について教えてもらいました。知事の方針の一部として、福岡県は「アジアの交流拠点」を目指しています。具体的に言うと、世界から見て日本を代表する東京と同じように、福岡県はアジアに対して日本の代表的な地域になろうとしています。その戦略として、福岡県はタイ首都のバンコク都とインド首都のデリー州と友好提携を結び、私が着任した1年目にはベトナム首都のハノイ市とも提携を締結しました。実際の国際交流を始め

るにあたって、福岡県は新しい友好都市を県民に紹介するフェアを開催することにしました。そして、友好都市から行政職員、伝統音楽家、舞踊家、伝統職人などを福岡県に招き、文化講演、伝統芸能などの丸ごと文化体験を県民に提供しました。私が福岡に来た時にはタイ・フェアがすでに終わっていて、インド・フェアの直前でした。

私が仕事を始めた最初の数週間ぐらいは、県庁よりフェアの会場にいた時間の方が多かったです。私の仕事は、デリーから来た行政職員3名と職人1名の訪問団をアテンドすることでした。観光や買い物に連れて行くとともに、フェアに来場した日本人のお客さんとの間で通訳を行いました。真ちゅうの花びんを手で作る職人を見たり、デリー州職員と日本の仏教とインドの仏教の違いについて話したり、インドの伝統的ドラムの叩き方を学んだりしたことがその1週間のいい思い出になりました。来場のお客さんも本格的なインド文化に触れ合える体験に対して感銘を受けていました。

なかなか珍しい仕事のスタートでしたが、次の数週間は県庁内の仕事に慣れ、普段の業務について学ぶために費やされました。多くのCIRと同様にレターの翻訳、プレゼンテーションのチェックなどの仕事がありますが、最も大切な業務は福岡県の友好都市と連絡を取ることです。全ての連絡は英語で行うため、私は上司から日本語で連絡の内容を聞いて、友好都市の担当者にメールや電話で伝えます。ほとんどの内容は公式訪問団の派遣、



タイ国・バンコク知事との会談での通訳

青少年交流、文化フェアの開催などに関するものです。意思決定に直接関係がありませんが、私は重要な過程に欠かせない役割を果たしていることに対して達成感を得ることができます。そして大学の歴史専攻者として、2008年2月の福岡県とハノイ市の友好提携調印などの歴史的な瞬間に何かの貢献ができたことに感謝しています。

この仕事をして4年間のハイライトは間違いなく、バンコク、デリー、そしてハノイで福岡フェアを開催するため海外に派遣されたことです。JETプログラムに応募するときに海外出張に行けると全然知らなかったので思わぬ喜びでした。それぞれのフェアでの仕事は、福岡県の代表として色々なブースに立って、福岡の産業、観光、文化や伝統などについての質問に英語で対応することでした。来場のお客さんとしばらく話をした後、不思議な表情または興味ありそうな笑顔で、「しかし、あなたは日本人じゃないよね?」と当然のように聞かれます。私は写真を見てのとおり日本人にそっくり(?)なので、福岡県のハッピーを着て福岡フェアで働いている私を見たタイ人、インド人、ベトナム人のお客さんは混乱したでしょう。事情を説明すると(もちろんJETプログラムのすばらしさも付け加えて)、少しは理解してもらえたようでしたが、完全には納得してもらえませんでした。それにもかかわらず、私を福岡県の代表に加えることに全く違和感が無かったことは、福岡県が実に「国際交流の拠点」であることを表す証拠だと思います。

インドに行った時の一生忘れられない思い出があります。ある日、フェアの仕事が終わった後、福岡に昨年来てくれたインド人の一人に自宅での食事に招待されました。誘いを受け、同僚と一緒にデリー郊外にある彼の家に連れて行ってもらいました。玄関でご家族と挨拶すると、すぐに彼に腕を捕まえられ、急いで中の部屋に案内されました。驚いたことに、壁の真中に福岡県のハガキが何枚も貼ってありました。彼は、福岡を訪ねた時に買ったハガキを見るたびに初めての海外経験を思い出すと誇らしげに語りました。彼の奥さんも、福岡県の素晴らしさやそこで会った優しい人々に



私の同僚とデリーの友人宅を訪問

ついて、息子と一緒に夫の話を何回も聞かされたと言いました。上の写真は彼の自宅です(背景にそのハガキが見えます)。言うまでも無く感動しました。

「国際化」という言葉は、JETとしての皆の仕事次第で、様々な意味で取られていると思います。私の場合は、自分の文化を周りの人に教えるより、自分の文化と異なる二つの文化の架け橋となる仕事を経験しています。しかし、その過程に参加しているだけで自分のアメリカ文化が思わず出てしまうことがあり、その結果生まれる日・米・印などの3カ国文化交流が非常に面白いと思います。その交流に触れる人は、他国の伝統、人の考え方、ビジネスや個人関係の作り方などについて色々な面で学ぶことができます。私は、日本人の同僚やタイ、インド、ベトナムなどにいる相手と真の友好関係を築くことができ、幸せです。この関係を将来も持ち続け、私と福岡県と世界の間で国際交流の絆を結んでいきたいと思っています。



Alex Blamberg

アメリカのニューヨーク市出身。25才。2007年にジョージタウン大学を卒業後、JETプログラムに応募し、福岡県庁国際交流局にて配属。主な業務は福岡県の国際交流事業の運営・サポートや県内JET参加者のカウンセリングなど。趣味は日本史や国内外旅行。昨年の10月に、日本の全都道府県巡りを制覇した。



オープン・マインド

広島県立福山^{いよ}韋陽高等学校外国語指導助手
Diane Poon
ダイアン・プーン

私がJETとしてどこに配置されたいかという書類を初めて受け取った時、どこでもよいと記入しました。その結果、広島県にある福山^{いよ}韋陽高等学校に赴任することとなりました。私は非常に幸せに感じて、「最高の場所に配置になった!」と叫びました。友人は笑いながら「でも福山や、広島のことは何も知らないでしょう。どうして最高って分かるの」と言いました。彼の言う通りでした。その当時、私は福山や、広島がどこにあるのかさえ知りませんでした。でも、素敵な場所なのだろうという気はしていました。

JETとして働き始めてから3年半が過ぎ、5年目の契約書にサインをしながら私はまだこう考えています。ここは最も素敵な場所であると。そして、一番大切なのは、私たちがいる「場所」ではなく、私たちを取り巻く「人々」なのではないかと。JETプログラムはチャレンジ精神や適応能力が必要とされます。そして私が今までに会った素晴らしい人々がいなければ、ここまでやってこれなかったでしょうし、この濃密な経験をも得られることはできなかったでしょう。

私の専門は科学に関する研究であったため、第二言語で高校生に教えるためのトレーニングをまったく受けていませんでした。しかしながら、私が赴任した3校の素晴らしいJTEs（日本人教師）のおかげで、様々な授業案を試してみることができました。時には惨めに失敗することもありましたが、驚くほど成功することも多々ありました。失敗し、そこからたくさん学ぶというのは、科学にも共通す

る部分があります。よってJTEsの、新しい案を試してみようとする姿勢や、先生達が自らの案を実際に確かめてみる姿勢、そして生徒にベストを尽くすように励ましたり、生徒の持つ潜在的な学習能力を信じたりするといった姿勢などに本当に感謝しています。同様に、快活で、進んで学ぼうとする生徒に対しても感謝しています。このようにして、生徒が楽しく、そしてやりがいのある環境の中で英語を学べるような授業案の作成に、私たちは時間をかけて寄与しています。

校外においては、時折、スピーチコンテストの審査役や夏に開催されるサマーキャンプの講師役として参加する機会を得ました。これらはすべて刺激的なものでしたが、最もやりがいがあったのは、平和を推進する目的で作られた広島国際交流プロジェクトでした。このプロジェクトは全县から興味のある生徒を集め、また留学生を広島県内の高校へ入学させるというものでした。

県の素晴らしいアドバイザーである小野先生に連れて行っていただいたサマーキャンプでは、国



文化祭でESS部による白雪姫の演劇



国際交流プログラム「もったいない」グループ

連のゲストスピーカー、広島大学の教授やJICAの人たちとともに、国際関係に関する集中的なトレーニングに参加しました。そこでは、生徒に世界の諸問題に対して自分の考えや意見を表現する方法や、生徒達の文化について議論する方法などを教えました。当初生徒は内向的でしたが、時間が経つにつれ大きく成長し、異なった視点を持つ生徒と議論を交わすことまでできるようになりました。英語はコミュニケーションの媒体として使用されていますが、ここでの焦点は、英語を教えることではなく、むしろ異文化の架け橋としてのツール=英語に置かれていました。このキャンプの主な目的は、国際的な平和問題について未来のリーダーを育てることでした。

私のグループは、環境に関するプロジェクトに取り組むことに決めました。6カ月後、私たちが国際ユース・デイ会議において、プロジェクトの結果や見解を発表した時、生徒は自分自身や意見を表現することが少しずつできるようになっていました。環境問題と平和がどのように関係しているのかと尋ねられた時、生徒はこう答えていました。

「持続可能な発展なしには、国は資源をめぐって戦争に陥ってしまうだろう。それを防ぐためには、各国が協力し、地球上の平和を持続させるのに環境的な解決法を見つけることがベストである」と。

私は生徒の成長した姿を見て、言葉で表すことができなかつたくらい驚き、誇りに思いました。そして、その生徒の成長の過程の中で、私が重要な役割を担う機会を与えてもらったことに感謝しています。このプロジェクトは、世界平和に貢献するプロジェクトを、生徒自身に責任とイニシアティブをもって取り組ませるという点で優れています。これに参加することで、生徒は強い慈愛の心を育み、異なる文化について視野を広く持てるようになるのです。

学校に戻ってからは、スピーチコンテストや英語

キャンプ、国際交流プロジェクトで学んだものを授業の中やESS部の中などで活用しようとしています。生徒にどのように国際情勢を学ばせ



JETたちとインドでボランティアをする

るとよいかという方法を考えていたとき、JETEsは、タイのGO-MADやコロンビアのPEPY、そしてインドのLongitudeという組織に入って行ったボランティア活動について、プレゼンをしてみてもどうかと提案してくれました。本当のことを言うと、はじめ生徒が貧困や第一世界とは異なる文化を見て、どのように反応するか心配でした。しかし驚いたことに、孤児院や荒廃した状況にある村々に住む子どもたちに対して、生徒は深く感情移入していたのです。また、子どもたちが着ている衣服や食べているものについて、多くの質問をしてきました。そして、そういった人々に向けて、どういった支援を行うことができるのか知りたがっていたのです。JETEsは、これらのボランティア活動がJETプログラムの参加者によって始められ維持されていることや、世界中で私たちが平和推進のためにどれほど積極的に活動しているのか知り、驚いていました。

やはり私は正しかったのです。福山は素晴らしい場所であり、親切で、前向きで、情熱的で、博愛の精神を持ち、そして人を感動させられるような人が多くいます。葦陽高校をはじめ、松永高校、油木高校のJETEs、そして、以上の素晴らしい機会を与えてくださった広島県教育委員会のスタッフの皆様に感謝を申し上げます。



Diane Poon

カナダ国モントリオール市出身。母国語は広東語とフランス語。マギル大学で環境科学を専攻。趣味は山歩き、写真、旅行、ボランティア活動。座右の銘はマハトマ・ガンディーの言葉「何かを変えたければ、まず自分が変わる事」。

Coordinating Internationally

One of the things I enjoy most about reading the CLAIR Forum magazine and attending various JET conferences is hearing what other JETs are doing across Japan. Despite participating in the same program and having roughly the same job description, everybody's work is pleasantly varied and makes for some very interesting reading/listening. With that in mind, I would like to use my column space to share with you a little bit about what my job entails.

Currently in my fourth year working as the CIR/PA for the Fukuoka Prefecture International Relations Bureau, I remember my first day on the job quite vividly. My supervisor sat down with me and explained the current state of affairs in Fukuoka Prefecture. As part of the governor's political platform, Fukuoka was dedicating a lot of effort and resources into building itself up as the self-styled "focal point for exchange in Asia". Essentially, Fukuoka wants to represent Japan to Asia, much like Tokyo does to the rest of the world. Putting this strategy into effect, Fukuoka Prefecture had recently signed friendship agreements with two major capital cities in Asia - Bangkok and Delhi - followed by third agreement with Hanoi during my first year. With these freshly signed agreements in place, Fukuoka wanted to start exchange activities right away by holding culture festivals to introduce the people of Fukuoka to their new sister cities. This involved inviting government officials, musicians, dancers, and artisans from these cities to provide educational lectures, traditional performances, and interactive cultural experiences for local citizens. The inaugural Thai Fair had already passed before my arrival, but I was just in time to help organize the India Fair.

During my few weeks on the job I actually spent more

time at the culture festival than in my office. My job was to attend and assist a delegation from Delhi which included three government officers and one craftsman. In addition to taking the group sightseeing and shopping, I joined them each day at the fair and helped interpret between them and the Japanese guests who attended the fair. Some of my best memories of that week include watching the craftsman carve a beautiful brass vase by hand, discussing the differences between Japanese and Indian Buddhism with one of the delegates, and (kind of) learning how to play the Indian tabla drums. I could see that the Japanese guests were equally impressed by the authentic Indian experience on hand at the fair.

After this somewhat unique introduction to my job, I spent the next few weeks getting settled in the office and learning more about my day-to-day responsibilities. Like most CIRs, I have my fair share of letters to translate, presentations to proofread, and so forth, but one of my most important duties is to conduct correspondence with our newly formed sister cities. Since all communication is done in English, my job is to get the information from my supervisors in Japanese and convey it to our counterparts overseas, either by phone or email. The correspondence generally involves organizing official delegation visits, youth exchanges, and culture festivals. While I'm not necessarily involved in the decision-making done by the higher-ups, I do get a great deal of satisfaction from my job knowing that I am an integral part of an important process. Being a history major in university, I also have a special appreciation for being part of something historic, such as helping to finalize the friendship agreement signed between Fukuoka and Hanoi in February 2008.

Open mindedness

When I first received the JET Programme form that asked me where I might want to be placed, I wrote that anything would be fine. The luck of the draw had me placed in Hiroshima prefecture at a base school called Fukuyama Iyo High School. I was giddy with joy and said: "Wow! I got a great placement!". My friend laughed saying: "But you don't even know a thing about Hiroshima or Fukuyama. How do you know that it will be great?" The truth is he was right. At that time, I had no idea where it was but I just had a feeling that it was going to be awesome!

Three years and a half down the road and signing up for a 5th year, I still think that it's the most amazing place that I could have landed on and would not have wished any otherwise. I think that sometimes it's not the place where you are that matters the most but the people who surround you. The JET program is challenging and requires a great amount of adaptation and without all the amazing people I've met, I would not have surpassed myself and gained such an enriching experience.

Coming from a science research background, I wasn't at all trained to teach high school students in a second language. However, thanks to the patience of my wonderful JTE teachers at the three different schools, we could try out lots of different teaching plans. Some of the plans failed miserably and others

worked wonders. This had a familiar feel to science, where we have to try, sometimes fail but always learn from our mistakes. For this, I'm really grateful to my JTE's for their willingness to try new ideas, for pitching in their ideas, for encouraging the students to try their best and having faith in the students learning ability. I'm grateful as well as to the students for being so cheerful and willing to learn. In this way, over time we are continuing to build fun lesson plans that students can enjoy to learn English in a pleasant and challenging environment.

Outside my schools, I sometimes got the opportunity to participate in judging speech contests and teaching various English summer camps. All of these were very exciting but, I have to say that by far, the project that was the most challenging and eye-opening for me, would be the Hiroshima International Exchange Project to promote peace! This project gathered interested students from all over the prefecture, and international students enrolled in Hiroshima high schools on exchange programs.

At a summer camp led by our amazing prefectural advisor Mister Ono sensei, we had an intensive training on international relations with guest speakers from the United Nations, Hiroshima University professors, as well as Japan's International Cooperation Agency (JICA). Then, I was asked to train the students to learn to express their ideas and opinions on



Alex Blamberg

Without question the highlight of my job over the past two years has been my inclusion in delegations sent from Fukuoka to hold Japanese culture fairs in Bangkok, Delhi, and Hanoi. When I applied to the JET program, I never thought that I would have the opportunity to travel abroad for work so it was certainly an unexpected treat. My job at these fairs was to represent Fukuoka Prefecture by staffing various booths and answering questions in English about what Fukuoka has to offer in terms of business, tourism, culture, and tradition. After talking with guests for a few minutes I inevitably get asked, “But, you’re not Japanese, right?” which is usually accompanied a puzzled look or curious smile. As you can see in my profile picture, my appearance is about as Japanese as apple pie. The sight of me wearing a Fukuoka-ken Happi jacket and working at a Japan Fair no doubt confounded our Thai, Indian, and Vietnamese guests. After explaining my situation - and putting in a good word for the JET program, of course - they seemed to understand a bit better, even if not fully convinced. Nevertheless, I truly believe that the nature of my job and the fact that my office has no reservations about my ability to represent the prefecture overseas is clear proof that Fukuoka is indeed the international hub it presents itself to be.

A particularly memorable moment came during my visit to India in October 2008. One night after working at the fair, I was invited to dinner at the home of one of the Indian delegates who had come to Fukuoka the previous year. Taking him up on the offer, my coworkers and I were driven to his house in the rural outskirts of Delhi. After being greeted by his family at the door, he grabbed my arm and hurried me along into the living room where, to my pleasant surprise, he had framed and hung several

postcards of Fukuoka on the wall. He went on to proudly tell me he had bought these cards during his visit and remembers fondly his first trip overseas every time he looks at them. His wife confirmed his enthusiasm by saying that both she and her son had heard many times from her husband about what a fantastic place Fukuoka was and all the kind people who lived there. The picture you see in this article is from their home (you can see the post cards on the wall in the background).

I suppose the word “internationalization” has a different meaning for all of us and depends very much on the kind of work we are doing as JETs. For me, the experience has been less about introducing my own culture to those around me, but rather helping to bridge gaps between two cultures very different from each other and my own. That said, simply by being a visible part of a process, I inevitably exude some aspect of American culture in my correspondence between Fukuoka and its sister cities which makes the resulting mix of Japanese-American-Indian intercultural exchange, for example, very interesting. Everyone involved is able to learn a great deal about the cultural traditions of different countries and how it affects the way people of those countries think and relate to one another, in both business and personal interaction. I have also been fortunate to develop genuine friendships with my colleagues in Japan and my counterparts in Thailand, India, and Vietnam. I look forward to maintaining these relationships well into the future as well as the opportunity to further develop international connections between myself, my prefecture, and the world around us.

英語

Diane Poon

world issues and to hold a discussion about their own culture. At first the students were shy but eventually they progressed so well that they could even manage to debate about different viewpoints. English was used as a medium of communication but the focus was no longer on teaching English but rather focused on using it as a tool to bridge cultural differences. The program’s main goal was to have these students learn to become future leaders on international peace issues.

My group chose to work on an environmental project. Six months of work later when we presented our results and ideas at the International Youth Day Conference, the students had come to gain confidence to express themselves and their opinion. When asked how environmental issues related to peace, they responded to the panel of judges that without sustainable development, countries would go to war over resources. Hence, in prevention, it would be best to have countries work together to find environmental solutions to maintain peace on Earth. I couldn’t express how amazed and proud I was at their progress and how grateful I am to have had a chance to play an active role in their improvement. This project was wonderful in that it encouraged students to have personal initiatives because they were put in charge of creating a project that would help promote world peace. By participating in this, the students also developed a strong sense of humanity and an ability to have an

open mind to cultural differences.

Back at my school I try to implement what I’ve learned from these speech contests, English camps and international exchange projects to classroom projects, ESS club activities and so on. Looking for a way to get the students to learn about international situations, my progressive minded JTEs suggested I do a presentation on my volunteer trips abroad with “GO-MAD” in Thailand, “PEPY” in Cambodia and “Longitude” in India. To be honest, at first I was worried about how the students would react to seeing poverty or cultural differences that were not from a first world nation. To my surprise, the students felt immense empathy towards the children in orphanages or villagers in dilapidated situations. I was also asked many questions about what they wear, what they eat, and many wanted to know how they could help these people. The JTEs were also surprised to find out that all of these volunteer programs were started and maintained by JET Programme participants and how active we were around the world promoting peace.

So in the end, I was right. Fukuyama is really a great place to be with friendly, forward thinking, enthusiastic, humanitarian, inspiring people to be around. Thank you, Iyo High school, Matsunaga High School, Yuki high school JTE’s and the staff at the Hiroshima Board of Education for making it all possible.

英語